

語学教育の場におけるインプロ(即興演劇)の有用性

—ラポールの構築に向けて—

大島ひでこ (大阪大学)、鈴木真理子 (東京日本語文化学校)、清水逸子 (杏林大学)

言語習得に限らず、物事を学ぶ場においては、ラ・ポールの確立が重要である。学習者の間に不安や緊張が存在すると、理解や記憶のプロセスにおいて障害が生じ、求める学習効率が得られないということが起こり得るからだ。また、トライアンドエラーが必要とされる過程で、間違っただけを恐れて消極的になり、発言が困難になるという現象は多くの学習者に見られる。これは、他人にどう見られるかという意識の働くクラス授業においてより顕著になると言える。

これらの問題を解消するにはキース・ジョンストンの提唱するインプロ (即興演劇) の理念が有用である。その理念とは、「がんばらなくていい」「失敗してもいい」という考え方である。

人は人前に出ると意義のある特別なことをしようとがんばってしまい、その結果、恐れと緊張が生じ平常心を失う。インプロの世界では、いかに、がんばらずに平常心でいられるかが大切にされ、失敗も当然のこととして受け入れられる。遊びにおいても、多くの場合、失敗は忌むべきものではなく、逆に歓迎すべきものである。鬼ごっこを例にとると、あえてリスクを負って鬼に近づき捕まるか、逃げおおせるか (鬼にとっての失敗) の瞬間にその面白みがある。このように失敗が歓迎される環境においては、失敗に対する恐れが軽減するため、そのなかでラ・ポールも築かれていくのである。「失敗が面白い」という精神の保障がなされれば教室が変わることにもなるのである。

インプロには即興で演ずる際に生じる諸問題を克服するためのエクササイズから発展した「ゲーム」と呼ばれる数多くの演技形式がある。今回は、ラ・ポール形成に効果的な「がんばらなくていい」「失敗が面白い」ことが実感できるもの、言語に関連のあるものを取り上げ、筆者たちが語学教育の場でどのように用いているかを紹介する。また、インプロが語学教育に寄与する更なる可能性についても検討したいと思う。